

西行法師といえば地位も妻子も捨てて出家し、歌と仏道に生きた漂泊の僧として知られる。とりわけ有名な一首「願はくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ」は辞世の句ではなく死の約10年前の作であると、著者は冒頭で世の誤解を指摘する。

裕福な家に生まれ、北面の武士御所の北側の警護隊)になり、古武道に長けたスポーツ万能のハンサムボーイ、と伝わる西行の「武人」の面にも光を当て、どの宗派にも距離を置く「自由人」として生きた西行の足跡を詳細に追ったのが本書である。

西行が生きていたのは平安末から鎌倉時代にかけての中世期。平清盛とは同じ年で、同僚でもあった。当時の資料は少ないため、著者は現代人の書いた西行関連文献を渉猟し、西行と周辺の人々も含めた知られざるエピソードを引用し、西行の歌を紹介しながら旅の実相を追っていく。

全7章のうち5章までに西行の出自と23歳での出家、高野山での修行から入寂の地とされる弘川寺(大



郷土発おすすめ

自由人 西行

名越 護著

(南方新社・2160円)

歌と仏道 旅の実相追う

阪府河南町)へ至る生涯が描かれる。

6章で西行の和歌文学や生き方に影響を受けた後深草院二条、連歌師宗祇、俳聖松尾芭蕉らに触れ、7章は民俗学の視点から全国各地の西行伝説を取り上げ、日置市吹上町花熟里の「西行坂」「西行法師腰掛石」も写真入りで登場する。

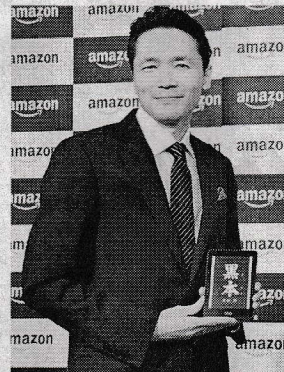
他の文献からの援用が多いが、出家の理由を著者は「いろいろな条件が重なり数寄の歌の道と仏道の両立をはかって隠遁生活を選択したのではないか」と結論づける。また西行の「平和主義」や木曾義仲に対する「冷たさ」に触れた記述に、著者独自の肉声を感じることができた。

西行は旅の途中、源頼朝に面会するなど当時の権力層に人脈を持ち、新風の和歌を完成させた業績から歌壇とも無縁ではなく、世俗からどれほど自由だったのだろうかと考えさせられた。

歌には解釈文がつき、現地調査の写真も多いので歴史探訪も味わえる。秋の夜長にぴったりの書である。(杉山武子・文芸誌「火の鳥」同人)

なごし・まもる 1942年宇検村生まれ。鹿児島民俗学会委員。

KDDIアワードを受賞した高城剛さん(右)とアマゾン日本法人の玉木一郎さん
 東京都目黒区



桜庭一樹の新作「ほんとうの花を見せにきた」(文芸春秋・1512円)に収録されている3編のうち、最も長い「ちいさな焦げた顔」が素晴らしい。

主人公は少年「梗」。梗は母親と姉を殺され、殺し屋に襲われそうになったところをムスタアに

ヤングアダルト・ノベルズ



救われ、ムスタアと彼の相棒、洋治の子どもとして育てられる。親代わりの2人は「パンフー」。中国から「ニッポン」に渡ってきた吸血鬼だ。ただ、人間との摩擦を避けるため、死んだ者の血しか飲まないし、人間と暮らすのも禁じられている。破れば厳刑に処される。ところが、年を取らずに

■ ほんとうの花を見せにきた

「書可ルだ」間につてしまとだろ技術が化を及だ。

生き長し
 らな高
 く死分
 言う
 があ
 いの
 まな
 い命